

長野県環境保全研究所 研究プロジェクト成果報告
「信州の里山の特性把握と環境保全のために」の概要

信州の里山の特性と魅力、そして今後の里山保全のための課題と展望について総合研究を行なった結果がまとまりました。この報告と資料を、地域独自の環境保全策の策定や地域の活性化などに幅広く役立てていただけることを期待します。

【プロジェクトの背景】

私たちの社会や生活の急激な変化にともない、里山環境が大きく変わりつつあります。里山には里山特有の生き物たちの暮らしや、またつい最近まで身近な自然を上手に利用した人々の営みがありました。里山の長い歴史を通して、地域固有の文化が育まれ、守られてもきました。そして今「人と自然とのつながり」が急速に失われつつあります。果たしてこのまま見過ごしてよいのでしょうか？

プロジェクトは、このような問題意識のもとに、地形・地質、動植物生態、人文社会などの分野が協力し、それら分野間の相互関連を重視しながら実施しました。

【プロジェクトの目的】

- (1) 長野県の里山の現状を調査し、その特性をまとめること
- (2) 長野県の里山のもつ魅力と価値を掘り起こすこと
- (3) 今日の里山が抱える課題を整理し、これからの環境保全に向けた展望を示すこと

【プロジェクト実施期間】

平成 13 年（2001 年）4 月～平成 18 年（2006 年）3 月 5 年間

（平成 15 年 3 月にはプロジェクト中間報告として、158 ページにわたる「里山としての長野市浅川地域」を公表しています）

本研究は、長野県の里山の現状をもとに、これからの課題や展望を総合的にまとめたもので、一冊の報告書のなかに総括と個別の研究成果が集約されています。第 1 章は総括部分で、第 2 章は個々の研究成果、第 3 章には関連資料が収められています。目次のあとに 1 章と 2 章について要約します。

成果報告書 目次

口絵 信州の里山景観（小川村）
信州の里山の原風景（4箇所）

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・富樫 均

信州の里山の特性とこれからの環境保全のための提言 1～20 ページ

- 1 信州の里山の特性
立地・気候・動物・植物・産業・文化
- 2 里山の現状と課題
里山変化の構図・里山の環境保全の必要性・里山の環境保全のための課題
- 3 信州の里山の価値と可能性

個別のテーマによる調査・研究成果報告 21～96 ページ

- 1 里山の何が問題なのか - 里山問題の概観 -
・・・・・・・・畑中健一郎・富樫 均・浜田 崇・浦山佳恵
- 2 土地利用変化に伴う植生への影響
・・・・・・・・尾関雅章・川上美保子・畑中健一郎・富樫 均
- 3 信州の里山にみられる希少植物・・・・・・・・大塚孝一・尾関雅章
- 4 マルハナバチの分布からみた信州の里山・・・・・・・・須賀 丈
- 5 里山の鳥類と里山環境 - 浅川地域及びその周辺における
サシバの生息状況 - ・・・・・・・・堀田昌伸
- 6 巻き枯らし（環状剥皮）を用いた雑木林のピオトープ創出と
樹林管理手法の検討 ・・・・・・・・前河正昭
- 7 里山と大型哺乳類～特にツキノワグマについて～・・・・・・・・岸元良輔
- 8 長野県の里山における土地利用変化とその要因・・・・・・・・畑中健一郎
- 9 暮らしからみた昭和20年代の資源利用とその変化
- 中条村伊折を事例に - ・・・・・・・・浦山佳恵
- 10 語りからみた戦前の信州の里山の暮らし
・・・・・・・・浦山佳恵・富樫 均・畑中健一郎
- 11 立地からみた信州の里山の類型区分・・・・・・・・富樫 均

資料編 97～165 ページ

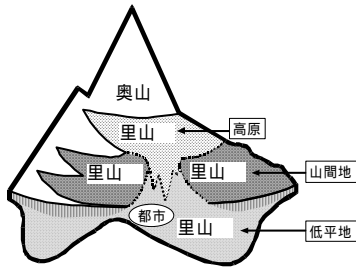
- 資-1 県内におけるユニークな里山保全活動の事例
- | | |
|---------------|------------------|
| 1-1 信越トレイルクラブ | 1-2 染屋の森の会 |
| 1-3 森倶楽部 21 | 1-4 小泉山体験の森創造委員会 |
| 1-5 野あそびの会 | |
- 資料-2 里山を味わうためのプログラム開発（新しい観察会の可能性）
資料-3 里山にたいする住民の意識に関するアンケート調査結果
資料-4 木質系バイオマスエネルギーの供給地としての里山の可能性について
資料-5 里山に関連がふかい県の主な事業紹介
資料-6 中条村の植物目録（藤原陸夫）

【第 章（総括部分）の要点】 3～20 ページ

里山の特性

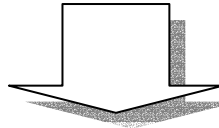
立地・動植物・人文社会など様々な観点から特性をまとめました

信州の里山の特性とは？



里山の3つの類型

低平地と山間地と高原に展開する広大な里山分布（3つの類型に分かれる信州の里山）
 多様な気候と多様な野生生物の共存
 （多雪と少雨、寒暖、多種多様な生物種など）
 地形と気候を生かした多彩な農作物の栽培、
 林業、観光などの様々な産業立地
 各地域ごとの個性的な文化
 （食べ物、暮らし、行事、工芸など）
 縄文時代にまでさかのぼる里山の利用の歴史
 と戦後の急激な変貌

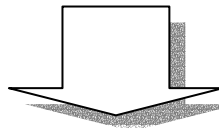


魅力と価値

「景観」「生物多様性」「文化」

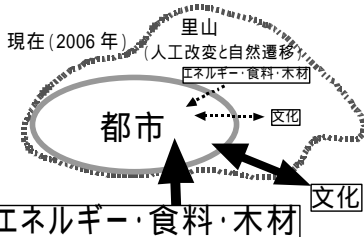
信州の里山の魅力と価値

奥山から低地までが凝縮された独特の里山景観
 全国的にも特筆される、野生生物の多様性
 山間地の地形や種々の環境を巧みに利用してきた文化や民俗



課題と展望

これからの里山の
環境保全のために



今日の里山をとりまく状況

地産地消の推進（里山が里山であるために）
 里山をもっと知ること（学びの必要性）
 里山保全の担い手確保のための配慮
 （高齢者と若年者の意識の違いから）
 新たな発想による里山整備の展開
 （生き物、散策の場、自然体験など）
 エネルギー資源の供給地としての可能性
 （木質バイオマスの活用など）

【第 章の要点】 個々の論文について

1 里山問題の概観・・・23～28 ページ

成果：わが国の里山で何が問題になっているのか、問題の全体像を把握しました

今日里山で生じている問題について、一般的に知られている情報を幅広い分野にわたって収集し、整理と分析をおこないました。これにより、里山の自然環境変化が里山を含む大きな社会環境の変化と連動したものであり、当プロジェクトのような総合的観点からの研究の必要性を明確にしました。

里山問題の全体像についての基本的な共通認識は、里山の環境保全に関連する個別の施策の横断的連携に役立つものと期待します。

2 土地利用変化に伴う植生への影響・・・29～38 ページ

成果：変わりつつある里山の自然の現状を、植生の観点から記載しました

土地利用履歴が異なる県内の4箇所について植生調査を行ない、かつての水田、畑、薪炭林、採草地の自然環境が現在どうなっているのかを記載しました。各々の地域の植生は違いはあるものの、総体的に土地利用の変化とともに草原的な環境から森林的な環境へと推移しつつあることを明らかにしました。

里山の自然が、全体的に森林化に向かう推移をしている現状が明らかになったことから、この結果は、県内の生物多様性の保全をはかるうえでの草原環境の保全の重要性を支持する科学的な根拠になります。

3 信州の里山にみられる希少植物・・・39～44 ページ

成果：里山にみられる希少植物のリストと分布変化に関する資料をまとめました

長野県全体の希少植物790種の51%の405種が里山に生育する種であることが判明しました。さらに絶滅種とされる31種のうち、71%の22種が里山の植物であり、里山という身近な場所の植物が深刻な絶滅の危険にさらされている現状を明らかにしました。

県の希少野生動植物保護条例等による希少生物保護の推進にあたり、現状に関するもっとも基礎的な情報として活用されることとなります。

4 マルハナバチの分布からみた信州の里山・・・45～50 ページ

成果：県内に生息するマルハナバチの種と分布に関する調査結果から、里山の草原環境の重要性を指摘しました

信州に特徴的な北方系の遺存種であるホンシュウハイイロマルハナバチとウスリーマルハナバチ(ともにレッドデータブック掲載種)が、信州の里山の草原的な環境を生息場所としていることがわかりました。これは、レッドデータブックに掲載されている多くのチョウ類とも共通するパターンであり、人の土地利用によって維持されてきた里山の草原的環境が、信州の生物多様性の保全にとって重要な意味をもつことを示しています。

県内の生物多様性の保全を図るうえで、草原環境の保全の重要性を支持する科学的な根拠になります。

5 里山の鳥類と里山環境・・・51～55 ページ

成果：里山保全のシンボリックな猛禽類であるサシバの生態について記載しました
北信地域の谷津環境に生息するサシバに注目し、その分布や採餌行動の観察記録から、サシバの生態と里山環境との関わりについて分析しました。

里山の生物多様性をはかるための、ひとつの指標ともなる猛禽類の生態に関する情報であり、希少野生生物保護や生物多様性保護をすすめる施策の科学的な裏付けとして役立つものです。

6 巻き枯らしを用いた雑木林のピオトープ創出と 樹林管理手法の検討・・・57～65 ページ

成果：雑木林の管理と活用方法について基礎的実験を行い、手法を検討しました
里山林の省力的な管理手法の一例として、巻き枯らし（環状剥皮）をとりあげ、皆伐更新や間伐の代替手法としての効果や、それが雑木林の甲虫類の生息に与えるピオトープ効果、および有用キノコの栽培の可能性について検討しました。

里山林の省力的な管理と、多面的な有効活用をはかるための手法としての基礎情報に役立ちます。

7 里山と大型哺乳類・・・67～70 ページ

成果：里山環境と関連のあるツキノワグマの行動記録について記載しました
飯綱山麓のツキノワグマの行動について追跡調査を行なった結果を記載し、飯綱高原の環境の変化と里グマ化の要因を分析しました。

近年の頻繁なクマの出没事例や、農作物の獣害に対する対応策の検討、あるいは野生動物の保護管理計画を策定するための科学的な根拠となります。

8 長野県の里山における土地利用変化とその要因・・・71～76 ページ

成果：里山の土地利用の変化実態を把握しました
長野県ではこの数十年間にほとんどの市町村で農地が減少し、人口減少率が高い市町村ほど農地の減少率も高い傾向があることがわかりました。また、中山間地域では農地から森林への変化が多く、かつては耕作休止後に植林することも多かったが、現在ではそのまま荒れ地化し、森林環境へと遷移しつつあるという実態が確認されました。

全県的な里山の土地利用変化傾向や、土地利用変化に関連する社会的な要因に関する基礎情報として、里山の環境保全や、中山間地域の保全等にかかわる施策策定に活用できます。

9 暮らしからみた昭和 20 年代の資源利用とその変化

・ 77 ~ 82 ページ

成果：里山の暮らしと資源利用の変化実態を把握しました

北信地域の山間地の村を対象に調査し、昭和 20 年代には農家が暮らしに必要な資源の多くを里山から得ており、合理的かつ循環的な資源利用が実現されていた。そして、農家が里山から得る資源の割合は著しく減少したものの、現在でも依然として資源を循環的に利用する知恵が残っていることがわかりました。

里山の多様な資源の有効利用の推進や資源循環システムを検討するうえでのヒントにつながる資料といえます。里山保全につながる施策として期待されるバイオマス利用の推進においても、かつての暮らしの知恵を活用できる可能性があります。

10 語りからみた戦前の信州の里山の暮らし・・・83~88 ページ

成果：昭和初期の信州の里山の暮らしに関する体験記録が収集されました

稲作・養蚕・馬を中心に複数の生業が営まれ、特に養蚕が重要な現金収入源になっていたこと、食事は身近に存在する食材を最大限に活用し質素ではあるが各地域で特徴のあるものになっていたこと、子どもたちは家の仕事をよく手伝いその合間に身近な場所や材料で工夫して遊んでいたことなど、昭和初期における多くの具体的な体験が記録されました。

里山問題に直結している今日の大量消費型の暮らしを見直すうえで、かつての省資源型の昭和初期の暮らしに関する情報は貴重な参考資料となります。また、里山の文化に結びつく日常生活の記録は、今後信州の里山文化の保全をはかる場合に基本的な資料として活用できます。

11 立地からみた信州の里山の類型区分・・・89~96 ページ

成果：里山理解を深めるために、重点調査地域のデータなどをもとに、信州の里山に関する新しい3つの類型区分を提案しました

地形と地質に着目し、立地という観点から信州の里山の類型区分を行ないました。その中で「山間地」と「高原」という2つの類型が信州の里山として独特な存在であることを指摘しました。また、高原に残る草原環境、そして山間地の里山に残る多目的な土地利用や多様な文化が、とくに重要な保全対象であることを指摘しました。

漠然と里山に対する一律の保全策を講じるよりも、立地に応じた里山の特性を理解し保全対象の絞り込みをはかることにより、より合理的かつ効果的な里山の環境保全の推進に役立つことを期待します。

(担 当)

長野県環境保全研究所 飯綱庁舎

倉沢明人・大塚孝一・富樫 均

〒381-0075 長野市北郷 2054-120

TEL : 026-239-1031 FAX : 026-239-2929

E-mail : kanken-shizen@pref.nagano.jp